第２回ＪＡ都市農村交流全国協議会 優良活動事例表彰（平成30年度）受賞事例のご紹介

最優秀賞はＪＡはくい（石川県）
優秀賞にはＪＡ紀の里（和歌山県）、ＪＡきみつ（千葉県）が決定！

　ＪＡ都市農村交流全国協議会は、「都市と農村の人の交流」や「ＪＡ同士や他組織との活動」を通じて、ＪＡのファンづくりや地域活性化につなげた優良事例を選抜し表彰しました。

　平成28年４月から平成30年12月までに実施された取組みから、「協同組合間連携」「地域の多様な組織との連携」を前提に、①事業拡大に貢献する先進性、②ファンの拡大度、③地域の活性化への貢献度合、④組合員メンバーシップの強化の度合を審査基準としました。

最優秀賞：ＪＡはくい（石川県）　『のと里山農業塾　農業体験と農泊』

■環境保全型の自然栽培に立脚して

　最優秀賞は、ＪＡはくいの企画『のと里山農業塾　農業体験と農泊』が受賞しました。

　地元羽咋市とともに、魅力的で特徴ある地域の農業方式として推進している、肥料や農薬を使わない環境保全型の自然栽培を中心に学ぶ「のと里山農業塾」を開講しています。「奇跡のリンゴ」知られる木村秋則さんを講師に迎えた「木村式自然栽培実践塾」（2010年）を発展させたものです。

　講義内容は、栽培理論と圃場での実習を基本に、特別講師による講演や先進農家視察、生産者との交流会を催すなど広い視野での取組みで構成しています。

山本好和代表理事組合長

　受講者として、農業に関心のある都市生活者や移住希望者を受け入れ、積極的に交流を行っています。「のと里山農業塾」の受講・修了者は昨年までの８年間で累計490名を数え、ＪＡはくい自然栽培部会はこの３年間で部会員が38名に増加しました。特筆すべきは、そのうち３割を移住者が占めることです。

■塾修了者が事業を牽引

　塾修了者が駅長を務める「道の駅のと千里浜」では、地域の魅力を活かした自然栽培農産物や加工品の売り場を展開して好評を得ています。羽咋市内で自然栽培のミニトマト生産を進めている企業の農場プロジェクトも塾の修了者が責任者として計画を進めています。昨年、首都圏での交流イベントやモニターツアーを企画し、農業体験に300名以上を「農泊」という形で受け入れました。

■「農泊」で通過型観光地から脱却

　このようにして収穫した自然栽培農産物の都市部への販売促進活動とあわせて、農業体験などを目的とした「農泊の推進」を通じて具体的に農家所得の向上を図っています。平成29年度にはじまった農林水産省の農泊推進事業と組み合わせることで、都市農村の交流をより活発に進めていくことにつながっています。金沢から能登半島への途中に位置する羽咋は、「通過型観光地」として位置づけされことが多くありました。そこで、平成30年10月に「ＪＡはくい農泊ワークショップ」を開催しイメージアップを図りました。

　その他「首都圏での交流イベント」「羽咋へのモニターツアー」「農業体験の受け入れ」など、多彩な農業体験メニューを楽しんでいただいています。このように、農を業として志向する移住者に最適な情報提供をすることで、都市農村交流を着実に継続することが、地域活性化への大事なプロセスのひとつであると考えます。

山本好和代表理事組合長は「今後も多様な組織と連携しながら、農家所得の向上と地域の活性化につなげるため、さらに頑張りたい」と振り返られました。

ＪＡはくい『のと里山農業塾』

優秀賞：ＪＡ紀の里　『絆をつなぐ★　めっ家の食フェス』

■ 全国からＪＡ女性組織が結集

優秀賞は、ＪＡ紀の里の企画『絆をつなぐ★　めっ家の食フェス』が受賞しました。

大原 稔常務理事

都市と農村の交流拠点と位置づけられる年間約80万人が訪れる大型直売所「めっけもん広場」で「食と農」を伝える啓発イベントを開催しました。

もともと、和食や地域の食文化を伝えるべく毎年趣向を凝らした様々な取り組みを行ってきました。組合員だけでなく地域住民など幅広い世代を対象にした食農教育や交流事業、地産地消への取り組みを行い、豊かで暮らしやすい地域社会の実現を目指しています。

日本が世界に誇る和食の魅力や、歴史と風土が育んできた郷土の食文化を広く伝え、よい食への気づきの場にしたいとの思いからこのイベントを企画しました。全国的にも初の試みとして、全国へ協力を呼びかけ、岩手県から福岡県まで10のＪＡ女性組織が集まりました。女性の力で、それぞれの地域で育まれた食文化や郷土の魅力をここに結集し、広く伝える『食と農』のフェスティバルになりました。

■ 地域特性を美味しさで伝える、協同組合間連携

イベントのメインは各地の食材を使った「羽釜で炊く釜めし」です。昔ながらの薪で炊く火力の調整や蒸らす時間などのノウハウは、ＪＡいわて花巻女性会の方々から学びました。

ひとつのＪＡに全国のＪＡ女性会が集まることで、各参加ＪＡ独自の郷土レシピによる料理をふるまい、交流会では、地域・ＪＡ・女性組織のそれぞれが絆を深める機会となりました。

ＪＡの女性部が羽釜で炊く地域特産のごはん作り

相互に支援しあい、当日だけでなくその前後でいかに多くの人たちがその取組みを伝え合い、共感を得られるかがとても重要です。地域特性の異なる協同組合間連携をさらに深め、今後も新たな企画に果敢に挑戦していきます。

大原稔常務理事からは「前回（第１回）に引き続き優秀賞をいただいた、これからも積極的に活動を進めていきたい」との受賞の感想が聞こえてきました。

優秀賞：ＪＡきみつ　『直売所を軸とした都市農村交流』

■ 次世代に君津の農業を知ってもらう

齊藤茂雄代表理事組合長（左）と、塩谷保幸常務理事

ＪＡきみつは、『直売所を軸とした都市農村交流』で優秀賞を受賞しました

農業を身近に感じてもらうために、管内の直売所を拠点にして様々な取組みをしています。他ＪＡの農産物販売や料理教室、収穫体験などの催しを通じ、交流を図っています。

ＪＡふくしま未来とは2011年より桃とりんごの産地間連携を開始し、女性部の共同購入などでも品質のよさが好評を得ています。山梨県のＪＡふえふきとは、キッズスクールの一環として直売所での果物の販売体験をしてもらっています。子ども達への食と流通の興味にも繋がっています。

対岸の川崎市にある川崎高等学校付属中学校とは、通年で君津のブランド大豆「小糸在来」をテーマに学習してもらい、出前授業や植付・収穫、大豆の加工調理で味噌づくりなどをしています。また、食育活動として房総の伝統料理である「太巻き寿司」をつくり、郷土料理の伝承を行うなど、君津の農業を知ってもらう絶好の機会としています。

■ 収穫体験や指導者付き体験農園も

大手不動産会社とは、マンションのコミュニティ形成の手法として夏と秋開催で「収獲体験」を実施。参加者の満足度も高く、夏参加した方がリピーターとなり秋にも参加してくれました。

その他、“土いじり”を生産者から直接学べる「指導者付き体験農園」を実施しています。５期目に入り、現在では体験農園で作った物を直売所で販売するほどになりました。「地域に愛される元気なＪＡ」を身近で利用しやすい直売所を拠点に発信しています。農家は消費者と、消費者は農家と交流することで、食と農への興味がより深まります。継続的に交流を進めるために、協議会を設立しました。羽田・成田空港からの利便性・地の利を武器に、訪日外国人の受入も積極的に進めています。

齊藤茂雄代表理事組合長は今回の受賞に当たり「担当職員の努力もあり、直売所を起点とした様々な活動が評価されたのだと思う。今後も継続して取り組んでいきたい」と語りました。

農園作業風景